第１２回　第１分科会会議録（概要）		場　所	新宿区戸塚特別出張所 地下１階集会室
日　時	平成 17 年 12 月 1 日（木） 午後６時 30 分～午後８時 30 分	記録者	【学生補助員】 田多井さやか　古谷聡子
		責任者	区事務局（菊地、並木）

会議出席者：32 名
（区民委員：24 名　学識委員：2 名　区職員：6 名　）

■配布資料
① 第１１回会議録
② 第１分科会レポート
③ 小学生フォーラム・中学生フォーラム案内

■進行内容
１．本日の進め方
２．中間発表会ＷＧからのお知らせ
３．レポートについての討議
４．その他（事務局）

■会議内容
【発言者】●：区民委員、◎：学識委員、○：区職員

○：（菊地）
時間も過ぎましたので、始めさせていただきます。
本日の進め方ですが、レポートの討議を中心に行います。
始めに事務局の方からお知らします。配布しました小学生フォーラム・中学生フォーラムについて、子ども家庭課の関原主査から説明させていただきます。

○：（関原）
こども家庭課の関原です。区長の前で小学生や中学生が意見を言おうというコーナーで各学校の代表の子どもたちに出てきてもらい、それぞれ意見を言ってもらう、というものです。趣旨についてはプリントの裏側に書いてあるのでご参照下さい。小学生フォーラムで簡単に説明しますと、区民会議でも 10 年後、20 年度の新宿区の将来像を討議していますが、これからの新宿区を担っていく子どもたちにも、10 年後、20 年後にどのようなまちにしたいのか、その思いを伝えてほしいという趣旨で会議を開きます。会議の進行は三部構成になっています。始めに質問コーナーとして“区長ってどんな人？”でリラックスしてもらい、次に事前に自分の考えるまちの自慢したいところをデジタルカメラで撮影したものを送ってもらっているのですが、それをもとに

まち自慢コーナーを設けています。最後のコーナーでは、みんなに知ってもらうにはどうしたらいいかを話し合ってもらいます。例年ですと、家族のみの傍聴になっていたのですが、今年は区民会議の委員の傍聴も何名か受け入れることになりましたので、希望される委員はチラシの裏面に書いてあります問合せ先の子ども家庭支援係までお問い合わせください。小学生フォーラムは 12 月 7 日まで、中学生フォーラムは 1 月 5 日までにご連絡ください。区議会からも傍聴の依頼がありましたので、そちらと併せて 5 名までの抽選とさせていただきます。是非お越しください。以上です。

○：（菊地）

それでは今日の進め方について、学識の汐見委員からお話をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

◎：（汐見）

皆さんこんばんは。いよいよ本格的にまとめの段階に入ってきました。本日はグループから全体の討論に移っていきます。その前に、本日の進行にも関わってくることなのですが、この第１分科会は現段階では私たち学識委員が世話役を行っているのですが、最終的には区民が自主的に会議を開くというものに移行していくのが目標です。そのために区民の方からリーダーを選んで運営を移行していきたいと思っています。リーダーは各分科会から 3 名で構成され、世話人会という全分科会をまとめる組織が編成されます。この世話人会が実質的な取りまとめをやっていくことになります。中間発表会を期に、世話人会が正式に発足することになるのですが、それまでに各分科会の世話人役が中心になって動くという体制に切り替えていく必要があります。杉山委員とも相談して、今までの進行を見させていただいたのをもとに、様々な判断をしたうえでこの委員に世話人になっていただきたいという判断をいたしました。始めにそのことをご審議していただきたいと思います。世話人のリーダーとして人生経験もあり、いろいろと配慮していただけると考えまして、地域の中での子育てグループの高山委員にお願いしたいと思います。次に、サブリーダーとして、今まで新宿区の活動に取り組んでこられたことと、その情報を持っておられるということを考えまして、乳幼児グループの工藤委員と小原委員にお願いしたいと思います。仕事はたいへん増えますが是非お願いしたいと思います。ご異存がなければこの形で進めさせていただきたいのですがよろしいでしょうか？

（一同拍手）

ありがとうございます。それでは心積もりがないとは思いますが、今日の進行を練習という意味もかねて、高山委員にお任せしたいと思います。私たち学識委員もサポートいたしますので、よろしくお願いします。今日のメインテーマはレポート討議です。第７回から各グループに分かれて提案をいただきました。その内容に修正・追加を加えてこのようなレポート集になりました。今までに何回か発表されてきたことを発展させて、要約したものになっているわけです。今日は時間がないのでそれを繰り

返すことはせずに、発表した内容とレポートにまとめた内容の変更点がある場合、その変更点、付加した点を中心に発表していただきたいと思います。

●：（高山）

ご指名を受けて少し緊張しておりますが、ご協力よろしくお願いします。

レポートについては全体にまだ目を通していませんので把握し切れていないのですが、中間発表会ワーキンググループの打ち合わせには私も出席しましたので、私から説明いたします。11 月 29 日に区役所で第１分科会から第６分科会までの代表が集まって話し合いました。第１分科会は私と森田委員と工藤委員と山田委員の４人で出席してお話させていただきました。初めて全分科会の代表が集まるということで、まだコミュニケーションがとれず不慣れな部分もありましたが、事務局が間に入って、来年の 2 月 19 日に各分科会で検討した経過発表会として行うことが決まりました。発表の仕方については分科会ごとに決めていくことになりました。発表の持ち時間は 20 分になりましたので、第１分科会としての意見をその枠内でまとめていきたいと思います。また、経過発表会という場ではありますが、意見交換の時間も設けたいという意見もいたしました。12 月 12 日に第２回目の中間発表会に向けてのワーキンググループを行うことも決定いたしました。したがいまして、中間発表会に向け、今まで６つのグループで話し合ってきたことをひとつにまとめ、他の分科会に負けないような発表にしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

中間発表会ワーキンググループについては以上にいたしまして、次のレポート討議に移りたいと思います。始めに各グループで作成していただいたレポートの変更・付加点について発表していただきたいと思います。新宿区民会議第１分科会レポートを参照しながら、この順番で発表していただきたいと思います。始めに、子育てのための環境グループよろしくお願いいたします。

●：（環境グループ：森田）

変更・付加した部分ですが、汐見委員にご指摘いただいた、新宿区次世代支援育成計画をそのまま基本構想に入れていいものか検討しました。それをレポートＰ1 の追加目標６、７、８に記しました（配布資料②Ｐ1 参照）。次に、我々の提案プロジェクトテーマとして明確にしたのが「子どもの参画」という点です。これは学識の杉山委員の著書にもあったのですが、ロジャー・ハートという研究者がより良い社会をつくるためには子どもの参画が必要だと唱えているのを知りまして、レポートに盛り込みました。あとは現状・課題のフォーマットをレポート形式に変えただけで、変更点はありません。Ｐ16 に子どもの参画の具体的プログラムを載せました（配布資料②Ｐ16 参照）。また、新宿区に流入する青少年に対する政策が抜けているということでしたので考えてみました（配布資料②Ｐ17 参照）。最後に、我々のプロジェクトをＰ19 に概念図にまとめてみました。先ほどの政策を考える組織を、持続可能社会ということで新江戸環境国際都市づくり協会をつくりまして、そこで１．基本コンセプト作り、２．

活動基準作り、３．活動プログラム作り等々、以下８までを行います。そこは、自然体験活動ＮＰＯ、環境教育ＮＰＯ、自然保護団体、青少年活動団体などとネットワークを結び、情報やノウハウの提供を受ける組織と考えています。さらに研究機関、専門家、国や東京都などとネットワークを結び、先ほどの基本コンセプトや活動基準をつくることを考えております。そして、そこが支援をしまして、ごく近隣の地域にまちづくり地域実行委員会を小さい単位でつくります。公園をコミュニケーションの場と位置付けて『茶屋の運営』（地縁的コミュニケーション形成・強化の場、地域のイベント、地縁的コミュニケーション、情報提供の場等）をする。また、地域実行委員会が『塾』（町内手作り部隊、青少年ライフセーバー隊、人材ネット、その他）をつくり、活動することを考えています。そのような地域をテストケースで１ヶ所つくりまして、ノウハウを蓄積して、地域Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと、新宿区に広げ、東京都に広げ、さらには全国に広げれば、このような持続可能な社会が実現するのではないかというのが提案です。以上です。

●：（地域グループ：高山）

ありがとうございました。始めにレポートの順番で環境グループに発表していただきましたが、全体を総括する問題を扱っているという点で共通すると思いますので、発表順番が前後しますが、次に、地域の中での子育てグループの発表をさせていただきます。

地域の中での子育てグループは、学校や公園、児童センター等の施設を見ながら検討してきましたので、以前発表した内容に対して変更はありません。基本的には地域グループは、先ほどの環境グループからも地域実行委員会という提案も出ましたように、地域組織を整えていかなければならないということをまとめました。

漠然とはしていますが、地域と環境は、第１分科会全体のテーマを含んでの課題整理だったので、本当は後に回した方がよかったのかもしれません。次回以降に中身であるところへ移っていきたいと思います。

次は親ステップアップグループお願いします。

●：（親ステップアップグループ：沖）

レポートのＰ20、21 をご参照ください。前回までは、step！「知ることが大切」とjump！「地域で考えよう参加型講習会」（配布資料②Ｐ21 参照）を発表しました。今回新たに hop！として「はじめの一歩」という支援体制を考えました。新宿区内で去年の資料を見ますと、1,800 人程度の新生児が生まれているのですが、その子どもたちと親の「はじめの一歩」をどう支えるかをテーマにしています。現在行われているサポートは、保健センターの保健師の訪問と子ども家庭課で行っている産後２ヶ月までのヘルパー派遣という事業です。私たちはその事業をもう少し拡大して、産後初期のサポートを考えました。Ｐ20 の下の方に図を描いたのですが、赤ちゃんができた子育て家庭を中心に置きまして、保健師と連絡をとりあって地域の研修を受けてサポートがで

きる方を紹介します。それに行政関連の職員の方が入るようでしたら児童館・保育園・子育て支援センターの職員の方も手助けしますということを子育て家庭に伝えることを通して、子育て家庭の中に入っていくことができないかと考えました。必要があれば２歳程度までそのような派遣を行い、いろいろ問題を抱えている家庭に入っていき、きっかけをつくることを通して、その後の問題にも対処しやすくなるのではないかという提案をします。そして、「はじめの一歩」で助けてもらった育児経験のある方たちもそうしたサポートに入っていくサイクルができると、地域の中で心強く動くことができるのではないかと考えています。後は前回の発表と同じです。

●：（高山）

「はじめの一歩助っ人」が新生児家庭に宣伝・アピールするということですか。

●：（沖）

もう少し深く関わることもあるのですが、新生児が生まれた際に保健師がお家を訪ねる時点で、「はじめの一歩助っ人」が一緒に付いて行き、ご挨拶をしてサポートのご案内と顔つなぎをして、その必要の程度によって支援体制を考えていくようなイメージです。

●：（高山）

質問は班ごとに行った方がよいでしょうか。

◎：（汐見）時間を区切ってならば、それぞれ質問の時間をとってもいいと思います。

●：（高山）

分かりました。ではもう３グループ済んでしまったのですが、今までの発表で質問のある委員はございますか。最初の環境グループでは「子どもたちの参画」がひとつ大きく付け加わったと思います。地域グループは簡単に説明しましたが、「協働」という形で受け入れられる雰囲気づくり、組織づくりを提案しました。

●：（末吉）

環境グループの新江戸環境都市づくり協会や茶屋など、こうした言葉の由来というのはどこから出てきたものなのですか。私などは江戸という言葉に鎖国などの負のイメージを持ってしまうので、お伺いします。また、マリンライフセイバーの都市版とはどのような活動なのか教えてください。

皆さんがどのように感じられるかと思いまして発言させていただきました。

●：（森田）

ユビキタスというのは、「いつでも・どこでも・誰でも」という意味です。今の情報化社会は、インターネット弱者にとって不利に働いており、コンピュータを使える人と使えない人の間の情報入手の差がどんどん大きくなっているといわれています。ユビキタスネットワーク社会というのは総務省で国の未来像として提案しているもので、コンピュータをもっと簡単に使えるようにして、誰でも平等に情報を得られるようにするということと、人とものをあまねくつないで未来社会をつくろうではないか、

というものです。しかし、私の解釈は少し違いまして、コンピュータは所詮道具なのですから、道具を目標にしてもおかしい話なので、その道具を使って持続可能社会をつくったらどうか、というものです。

次に、持続可能社会はイメージしにくいものですが、以前の発表でも申しましたように、身近な江戸にエコロジーでリサイクルな都市があったではないかと考えます。明治以降、江戸は封建社会として暗黒の時代という悪いイメージを持ちすぎたのではないでしょうか。汐見委員もおっしゃるように近年江戸学が盛んで、書籍もたくさん出ています。それを読むと、江戸という社会は不便なのは確かですが、不便だから不幸かというのは違っていまして、非常に明るく人々も生き生きと暮らしているではないかと感じます。その証拠にかなり高い文化レベルを維持していました。浮世絵などの文化や天ぷら、うなぎなどの食文化もその頃に生まれたものです。それに加えて石油を使わず、ほとんど太陽エネルギーであれだけの文化を維持していました。逆に同時代ヨーロッパは植民地を持ち、戦争をして国政を維持していました。江戸を真似して江戸に戻れというのではなく、江戸から未来社会のヒントを得て持続社会を実現したら良いのではないかと思います。私が持続可能社会にこだわっているのは、温暖化が進みこの百年の間に地球の平均気温が４度上がるといわれています。それはまともに暮らしていけないということを意味するとわかりました。その社会が自分の子どもや孫の社会に迫っているものですから、そういったことを知ると、一気に持続可能な社会にしないと、我々に未来はないということが最近気づいたことです。その持続可能な社会に転換していくことを、我々ではなく次世代の子どもたちに賭けたらいいのではないか、そういう子どもを育てることを教育の目的に据えないと良い社会は来ないと思います。それと同じようなことが、2002 年に国連総会で「持続可能な開発のための教育の 10 年」が採択されまして、各国でそのための教育の動きが出てきているので、そのような内容を新宿区の構想に据えてもらえれば、我々も夢と希望をもてるのではないでしょうか。つまり、持続可能社会をつくる、そのイメージとしての江戸をつくる。その方法論として、近隣でネットワークをつくるとともにユビキタスを道具に使って情報を誰でも手に入れることができるように、各機関がネットワークを結んでやればいいのではないか、という提案です。環境問題などの活動をしている組織は多くあるのですが、個別に行われているので成果をあげることができていません。それをいかに一般化するかというのが、方法論としてのテーマではないかと思います。小さな地域のネットワークと大きいネットワークをいっしょにやらないと世の中は変わらないのではないでしょうか。基本コンセプトで、公園で地域の茶屋をつくり地域のコミュニケーションを強化するとしました。さらにはユビキタスネットワークで、小さな子どもでも研究者の考えを知ることができるようになれば、正しい生の情報が入ってくるのではないかと考えています。

また、マリンライフセーバーに関しては、子どもたちの組織がありまして人気があ

ります。都市でもそのようなものをつくれば、身体を鍛えながらゲーム感覚で組織ができるのではないでしょうか。子どもの活動を核に地域の助け合いが強化されるのではないかというイメージで提案しました。

●：（上野）

中間発表会で 20 分という持ち時間の中で説明するには、量が膨大すぎるのではないか。一本化したほうが分かりやすいのではないのでしょうか。今後どのように絞っていくのか心配になりましたがいかがでしょうか。

●：（森田）

発表のときは勿論全部言う必要はないと思うのですが、区民会議の目的は何かを決定するものではなくて、行政に自分達の問題意識を提案して、そのうちいくつかを基本計画に入れてもらうというのが目的だと思うので、提案書はありとあらゆるものを提言していいと思います。何もひとつに集約して形良くする必要はないと思います。

●：（高山）

20 分と時間も区切られましたので、まとめ方はこれから皆さんと討議していきたいと思います。他にありますか？

●：（沖）

子育てのための環境グループのレポートに「子どもの参画」とある点は、私も同じようにとても重要なことだと思います。ただ、具体的な内容が私の考えていることと違うので、発言させていただきます。子どもが参加することが手段になっているのではないかと思いました。トレーニングをして子どもに学ばせて何かをさせようというのではなく、子どもたちが自分たちのやりたい物を自分達で実現するというものにできたら良いと思います。

●：（森田）

今日話したことは変更点ですので、Ｐ8 をご参照ください。

●：（高山）時間もあまりありませんので、後日の議論としたいと思います。

●：（山田）

レポートを拝見する中で、地域の居場所関係も子育てのための環境グループのレポートの中に含まれていますし、何のためにどう使うのかという観点から見れば、それぞれの世代別のグループと内容が重なっています。それをうまく整理すると、第１分科会全体のグランドデザインになるのではないかと見ていました。そういう意味では、失礼ですが、子育てのための環境グループのレポートをたたき台にして、全体の考えがうまく収まっていくのではないかと思いました。

●：（司会：高山）

先ほども申し上げましたが、子育てのための環境・地域の中での子育てグループは全体的な問題になりますので、そういった意味では抽象的なのかもしれません。その裏付けになるのが、他のグループで検討してもらったことになると思います。

他になければ、時間もありませんので、次の小中学生グループに移りたいと思います。それでは、お願いします。

●：（小中学生グループ：柳原）

「開かれた学校づくり」をテーマに、メンバーそれぞれが現状を見るために、小学校にお邪魔して校長先生にお話をうかがいました。先日の発表は、それぞれが持ち寄った意見で発表しました。

今回の変更点は、グループ発表で提案できなかったものです。「地域教育力アップのための人材バンクづくり」について具体的に発表します。

29 ページをご参照ください。その外のテーマにしたものを支える人材ということで、その人材の確保をどうするかということに焦点を当ててみました。これについては、後ほど詳しく説明させていただきます。

他に、変更点として、ひとつは 26 ページの「学校評議員制度について」です。これは新宿区としては平成 14 年から実施されました。平均 9 名で学期に 1 回開催し、メンバーは地域の住民です。学校評議員の会議でいろいろな提案が出されれば良かったのですが、現状はそうはいってないようです。そこで、学校が地域に開かれた学校になるように、評議員のメンバーに地域住民や教員も同じテーブルに付いて、校長先生を議長にして、ともに学校を応援していくという気持ちで学校を運営していったらどうかと提案しています。これは人選やその後の研修ということがとても大事です。人選については半分を公募とします。内容としては自分たちで年間プログラムをつくって、学校のさまざまな課題について検討するものです。日ごろから、学校は地域から閉ざされがちになっていますので、新たな学校評議員制度をきっかけに、何か問題が起こった際、学校が閉鎖的にならず、スムーズな解決策が取れるようにしていこうと考えました。また、いろいろな裁量権が国や都から地域自治体に移ってきていまして、そのうち学校独自のことができれば良いなと思います。その際には、クラスの定員や教員の採用等、学校についての課題について、最終的に学校評議員の場で責任をもって、学校の特色を生かして提案、決定できるようになればと提案しています。

また、27 ページの「学校選択制について」ですが、これは平成 16 年度に新宿区では導入されました。学校選択制については、グループとしては廃止の方向で要望を出すという結論になりました。理由としては学校を選ぶ親の見た目の印象、イメージ、噂で学校を決められてしまい、結果として、定員が不足している学校が現れたり、逆に定員オーバーになってしまう学校が現れたりして、住民にいらない動揺を広げてしまうのではないかと考えたからです。また、安全の面からも登下校時や放課後の過ごし方については、学校選択制によって児童の帰宅するまでの距離が長くなり、子どもの負担が増えてしまうと考えています。他にも地域を考えた場合、学校選択制は不自然ではないかということで提案しました。

次に、「学校図書の充実と有効活用について」は、サポートバンクのところで説明を

したいと思います。

基本的には学校の垣根を低くすることと、埋もれている地域の力を使い、魅力的な学校をつくっていこうということです。

●：（小中学生グループ：三浦）

「開かれた学校づくり」をもとに６つのテーマを設定し、その中で「地域教育力アップのための人材バンクづくり」は、さまざまな問題が出てくる中で横断的な解決策のひとつではないかということで提案をしました。これを簡潔に 29、30 ページにまとめてあります。いろいろな制度をつくる際に、行政でつくると、どうしても形骸化してしまいます。それをうまく、長く運営していくためには、やはり、区民が行政の力を借りながら、保護者や学校、地域が連携しながら運営していくことが良いのではないかと思います。そこで、ＮＰＯ団体をつくって、みんなで運営していこうという提案です。グループのメンバーが校長会等で取材をしていると、地域が非常に充実して学校と連携しているところがある一方で、商業地域等では地域で学校を支えていくことが、なかなか難しいところも見受けました。いろいろな地域がありますが、地域の中でスクールコーディネーター制度を採用している場合でも、地域性によりさまざまで難しいところがあります。そのような地域であっても、学区域を超えてサポートするという提案です。実施内容は、地域に埋もれているいろいろなことのできる人材・専門家・ボランティアとして時間があるが、何をして良いかわからないという人たちに、「こんなことができますよ」ということを登録してもらい、ＩＴで管理します。それを、ＮＰＯ法人新宿スクール・サポートバンク事務局をつくって運営していくということです。したがって、会員制登録という形をとります。

次に、30 ページの中ごろの、組織の概要について説明します。会員制登録をしていただいて、登録していただいた方が正会員となります。できること、やりたいことを具体的に登録してもらい、事務局を設置し、そこのスタッフが運営します。また理事や監事をスタッフや官・民・学識経験者など立場の違う人材の中から選出します。また経費は、区からの補助に頼るだけでなく、会員の会費、企業からの寄付金等で運営します。もちろん登録した方には研修を受けてもらい、傷害保険にも加入してもらいます。サポートをするだけではなく、報告書やアンケートを作成してもらい、フィードバックさせるという作業もしてもらいます。

30 ページの上のところに事業内容というのがあります。これは学校訪問で、校長先生に質問をした際に、お話に出てきた具体的な内容を取り上げています。他にもあれば事業として取り上げていきます。こうした事業内容ができる人材を探して登録し、事務局が支えていきます。

このような方法で区民が中心となって応援することで、このシステムがさまざまな人々が支えているという意味において、一番生きた活動になるのではないかと考え提案させていただきました。

●：（小中学生グループ：柳原）

補足として、30 ページの最後に「達成された姿」をご参照ください。やはり子どもたちを育てる肝心なものは「教師の質」です。それを良くするためには、研修や制度もありますが、教師の忙しい雑務の負担を少なくして、もっと子ども達と向き合える時間を確保することが必要だと思います。

●：（司会：高山）

それではこの発表について、何か質問はありませんか。

●：27 ページの「学校選択制について」では、もっと視野を広げて、障害児や不登校児の視点も含めて、もっと議論を深めてもらいたいと思いました。

また、本日の討議についてですが、1 人 3 分とか、時間を決めて発表や質問をしたらどうでしょうか。

●：（司会：高山）

討議については時間もありませんので次の機会ということにしましょう。時間も迫ってまいりましたので、次の青少年グループの発表をお願いします。

●：（青少年グループ：山田）

まず、最後のところで、37 ページの「拠点づくり」と表記してありますところで、これはシンプルに書いてあるとおりで、このテーマは子育てのための環境グループ、地域の中での子育てグループの外にも、第１分科会以外にも関連があると思いながら書きました。今の既存の施設が効率的に運営されていないという現状があり、絶対的な見直しが必要だということです。

次に 34 ページに戻りまして、まず、「ジュニア市民会議」については、先日発表したとおりですが、子育てのための環境グループの発表された参画に当てはまります。より社会に近い年齢である高校生に対しても地域社会に参画させた方が良いと思います。

次に 35 ページの「世代間交流」ですが、こちらは小中学校グループの「地域教育力アップのための人材バンクづくり」と発想は同じです。したがって、必要なカテゴリーは違ってはいますが、組織を運営するにもお金は必要ですが、予算も限られていますので、世代にかかわらず一緒に合わせて１箇所で行えば、お金がかからないと思います。これをどう実現するかというところを次で考えていければと思います。

もう一点は、この「世代間交流」のベースとしましては「持続可能な開発のための教育の 10 年」の実現に取り組むＥＳＤ－ＪというＮＰＯがあります。この発想の中には「持続可能＝環境」ととられがちなのですが、実はその中には「人権」という言葉があって、リサイクルとか環境に限られたものではないのです。その延長線上に「世代間交流」があり、私たちの発表した際にパワーポイントで作成したライフサイクルの循環図も持続可能な社会につながっていています。それに基づいて、高校生より少し上の年齢の大学生へも拡げ、すべて循環するという発想です。

36 ページの協働のための連携をどうするかということは、前に発表したとおりです。行政はセクションを超えたプロジェクトチームをつくり、縦割りではなくテーマに沿った横割りのプロジェクトチームを立ち上げて、横の連携を促進させていくことが基本テーマです。これも先ほどの 25 ページの小・中学生グループが発表した「子どもの居場所作り」で、これは学校と区民との架け橋をどうやっていくかということだったのですが、最後の「達成された姿はどのような状態か」に書いてあるとおり、小中学校とともに地域の人々に支えられた学校づくりが高校にもいえるということです。ただし、高校と小中学校でひとつ違うのは、高校は新宿区の管轄ではありませんので、そこはクリアしなければなりません。しかし、基盤づくりは同じだと思います。

●：（司会：高山）

青少年グループに質問はありますか。無いようでしたら、最後になりますが、乳幼児グループ、発表をお願いします。

●：（乳幼児グループ：小原）

乳幼児グループは前回までのキーワードを合わせた結果、ベビーカーで行動できる範囲で「ゆったり一の」的な試みを行うということで話し合いを進めてきました。前回の発表では、３歳児の居場所づくりを中心に行ってきたのですが、その後も話し合いを進めていくうちに、それは違うのではないかということになりました。だんだんと、地域の中での子育てグループや子育てのための環境グループと同じような内容の討議になってきました。その理由としては、子育ては連続しているので、年齢で区切れないということがあります。当然、親の子育て力アップは必要です。しかし、だからといってただ居場所を提供するだけで良いかというと、そうではありません。親の不安やストレス解消のために、子どもを見てもらうことが必要だという一方で、親と子が向き合う時間も必要でもあります。結局、グループの中では、そのどうどうめぐりになっていました。

また、前回の発表において「子育ての社会化」は、親を甘えさせているのではという反論がありました。これに対する明確な反論ができませんでした。親を助けているだけで終わってしまうということは、子育て支援をしている自分たちも思っているところです。では、どうしたら良いかというと、親のステップアップ講座を開き、その結果、親の不安やストレスが無くなったら、それでゴールとすることが「子育てしやすい社会」になったとはいえません。今度はステップアップした親が、地域に還元していかなければならないのです。そうした時に子育て支援施設で手伝おうと思うと、うまく循環しません。そこで地域に還元しようとしても還元できません。地域からみて、どちらかというと浮いてしまっている世代（＝親）としては、地域に還元しようとしても接点がなく、還元の手段や方法がありません。子育て支援施設でどうにかしようとしても、限界ではないかという話になりました。結局は、地域全体が子育て支援施設でないと地域に還元できないと考えました。そして、親が地域に還元して初め

て親が社会化し、子育てが社会化し、それらが循環するという結論に至りました。そこから、「子育てを核とした地域再生」というタイトルになりました。

そこで、レポートの 40 ページで、新宿区、つまり行政が施策を考えると、行政が考える子育て支援施設が真ん中にあり、地域が別にあり、そことどう連携するかという話になってしまいます。一歩進んで、41 ページにあるとおり、居場所を中心に地域と関わったり、行政と連携したりということが次のステップになってくると思います。「地域＝子育て支援施設」にするには、地域に子育て世代が入って来なさいというのではなく、子育て支援広場が地域の活動場所にならないといけないと考えます。少し抽象的ではありますが、このようにまとめました。

●：（司会：高山）

地域といった場合、具体的にはどのようなところを考えているのでしょうか。町会とか商店会とかでしょうか。

●：（乳幼児グループ：小原）

そういったところと融合しないといけないということです。

●：（司会　高山）

ありがとうございました。それでは乳幼児グループに何か質問等はありますでしょうか。

●：講座を開催するというより、地域がネットワークを組めるということを現実の中で見出したいと思っています。実際に実践していることをステップアップして、まとめられていると思いました。今、私は育成会に入っていて、子どもたちの参画についていろいろと実践ています。しかし、子どもたちに関することをいろいろ行っても、大人がなかなか興味を持ってくれないというところが難しい部分です。子どもが小学校に入ってしまうと、ほとんど手放し状態になってしまっていることが現実です。その中で、ＰＴＡ活動をしている親はごく一部なのかなと実感しています。そうした現状で、何が大事なのか、何が必要なのかと考えた時、小学校入学前の子どもは「かすがい」であって、「かすがい」世代の段階で、ある程度、地域と関われる場所が必要なのかなと思います。押し付けるということではなく、小さい子どもたちを巻き込んで親を引き込めば、幼稚園、小学校、中学校と関われるのではないかと考えます。幼稚園で活動をした親は、そのまま小学校、中学校と活動をします。同じ人がステップアップして活動をしています。ただ、私立の幼稚園に子どもを通わせていた親は、地域になかなか入りづらい。保育園のお母さんは特に、土・日曜日しか参加できないにも関わらず、今は学校は土・日曜日が休みになってしまい参加できないでいます。したがって、ＰＴＡ活動になかなか入ってこられず、小学生になれば子どもは、ひとりでいろいろなことができるようになってしまうし、それでいいのかなと思ってしまいます。

こうした状況で、関係を持たせられる場所はどこなのかと考えると、やはり子育て支援施設や児童館のサークルになってくると思います。そうした場所に集まって、親

同士が子どもたちの話ができれば良いと思っています。現状では、子ども家庭課から補助がつくのは、ほとんど育成会です。また、育成会はいろいろな立場の人が集まっています。私は、さまざまなチャンスが親に与えられることがとても必要と思っているので、参加型講習会にも参加しているわけです。ただし、親に単に勉強を押し付けようとかではないのです。押し付けているところもあるが、そこで親が考えていることが聞けると良いと思っています。理想はたくさんありますが、どうしたら現実になるかという発想から考えています。例えば、先日行われた江戸川のイベントでは、午前中は親の発想でつくられた遊び場で遊び、午後は講習会を開き、そこにいろいろな想いを詰めて帰ってもらう、それが参加型なのです。こうしたことも新宿区でできれば良いと思います。決して、それがゴールではなく、地域に入っていけるような参加型講習会であって、現場のお母さんたちが運営にあたり、参加してもらい、そのお母さんたちが、例えば口伝等で他のお母さんにも講習内容を教えてあげることができます。来てくださいではなく、私たちがみんなで考えた企画なのですといえるようになると良いなと思います。

●：（司会　高山）

ありがとうございました。そろそろ時間も迫ってきましたので、学識の汐見委員のからコメントをうかがいたいと思います。よろしくお願いします。

◎：（汐見）

聞いていまして、これから議論していくと、おもしろいものができそうだと思いました。時間も決まっている中では、到達点を決めていくしかないと思いました。

課題だけ言いますと、子育てのための環境グループから出された提案は、総論的な、第１分科会全体としてレポート等を書く際に、こういう社会をつくっていくというテーマです。こうした目標がはっきりしないために、若者がどうしたらよいのか分からない状態にあります。そういう視点を第１分科会はどうやって入れていけばよいかと考えながら聞いていました。第１分科会が提案を出す際には、はっきりとした方向を持って提案すべきだと思います。だた、実際に合意していくには、なかなか難しい問題があると思います。例えば、「ユビキタス」、「持続可能な社会」、「江戸」というキーワードが３つ出ています。「ユビキタス社会」というのは、国から提案された時には、コンピューターが生活の中に入ってきて、誰でもがコンピュータ社会の恩恵を共有できるようにということが始まりでした。しかし、これは賛否両論があります。一方、「江戸」をお手本にというのは面倒だけれども、自分の手で何事も行っていきましょうということです。これはうまくいけば、とても注目されます。江戸時代でも何度も失敗して、やっと自然と共生しましょうという社会になったのです。そこから我々も、学びましょうということなのです。しかし、「ユビキタス社会」と「江戸」は方向性が違います。ですから、森田委員が説明したように「コンピュータをツール（道具）として使おう」という意見には、なるほどと思って聞いていました。そこに「持続可能な社

会」がもうひとつの目標として、入ってきた場合に、うまく統合できるのかなと思っています。これからも議論が必要と思いました。

また、最近「危険社会」という言葉が出てきています。これはドイツのウルリッヒ・ベックという学者が提案しています。要するに、現代社会は競争社会になっている。その中で幸せになるには、この社会に参加しなければならない。しかし、競争は必ず勝者と敗者を生み出します。その競争の中では、途中で脱落した人たちの脱落した怨念のようなものをうまく解消しなければ、必ずそれはネガティブな形でどこかに爆発してきます。そのような怨念をもった人が、ちょっと知識を持てば人類を絶滅させることも可能なのです。また、浮浪者や不審者が、そうした怨念を持って、それを子どもたちに向けるということが、あちらこちらで起きています。また、子どもが自分の中で感じた無念さから、子どもが子どもを殺すところまで来ています。そうしたことが、どんどん起こってしまう社会が「危険社会」なのです。

では、それをどうやって防ぐかとなると、フィンランドでは学力世界一で注目されていますが、最も注目すべきことは国の国是は「機会均等の実現」なのです。幸せになる機会は、誰にでも均等に与えられているということで、貧富の差のために、教育の差が出るのはおかしいという理由から大学までの授業料は無料としています。同様に、貧富の差のために、本が読める、読めないということもおかしいので、公共図書館も大変発達しています。さらに、人種、男女で差がでないようにする。そうすることで、社会が安全になる。それをやらないと、社会がリスクをかかえてしまう。したがって、社会の安全を考える際に、人々が平等に幸せになるような視点を持っていなければなりません。ですから、区民会議の場でもそうした視点を持たずに提言を出すと、競争という論理が残ってしまい、課題は解決できないのです。これはとても難しいことですが、どういう社会をつくっていこうというイメージを第１分科会として議論しないといけないと思います。

次に、20 ページの親ステップアップでは、「母子手帳をつくり」とありますが、私は「母子手帳」ではなく「親子手帳」や「育児手帳」に変えてほしいと思います。

次に小・中学生グループの「新宿スクール・サポートバンク（仮称）」については、良いアイデアだと思います。ただ、ここで議論してほしいのは「現状と課題」のところの内容です。以前に、「現状と課題」を書いて、次に「提案」をという説明をしましたが、「現状と課題」の中に「新宿区次世代育成支援計画」の施策における現状に触れている箇所が少ないのです。区民として施策をアセスメントするという形が良いと思います。

また、学校選択制についていろいろと議論が出てきました。この場合、区が実施しているものを止めようとか、逆の意見を表明する際には、慎重に行わなければなりません。学校選択制になって、メリットもデメリットもありました。したがって、保護者に学校選択制についてどこが良くて、どこが悪かったかをきちんと聞いたうえで、

分科会として提言すべきだと思います。

最後に、中間発表会は私たちの分科会は、この点が目玉ですとか、これが言いたいことですということしか説明する時間はないと思います。

◎：（杉山）

具体的な中身については、区民委員が主役の議論なので、発言は控えさせていただきます。やはりここまでくると、議論は十分に行ってきましたし、私はどうやってまとめていくかが問題なのではと思っています。多くの提言の中でどう引くか、どうエッセンスを引き出していくか、理念や具体策はシンプルで分かりやすいものでないと、相手には伝わらないと思います。

また、先ほど、森田委員から意見がありましたが、想いをぶつけられっぱなしでは学識経験者や区の職員は困ります。ぶつけるだけではなく、区民はこれを実行するんだということを見せていただかないと受け入れなれないと思います。

具体的に感じたのは、親をどうするという提言と子どもをどうするという提言と、ふたつあったと思います。これを整理する必要があると感じました。

次に、協働ということで子育て支援を考えた際に、いくつかのキーワードがあったので、お話したいと思います。具体的な仕組みをつくっていく中で、行政が音頭をとって、行政とＮＰＯとの協働の推進をどうつくっていくかを、全て公開で話し合い、評価を行うという仕組みをつくる。ひとつには、ファンドをつくる。またイギリスでは協働を進めるために「コンパクト」という協定書をつくり、話し合いの場をつくるというものもあります。杉並区では、子育て応援券、つまりバウチャー券を導入するといったように、提言の中に具体的に落とし込んでいく際には必要なのかと思います。

●：（司会　高山）

ありがとうございました。まだまだ議論は十分ではないかもしれませんが、中間発表という形で発表しないといけませんので、それについてはみなさんと話し合いで決めていきたいと思います。

今後は、中間発表会に向けて活動していきます。その内容について、話し合いたかったのですが、時間もなくなってきていますので、本日の分科会終了後、グループのリーダーだけで集まって、話し合いたいと思います。

事務局から事務連絡があればお願いします。

○：（並木）

次回の日程を確認してください。

第１３回

日時：平成１７年１２月１３日（火）

午前１０時３０分から午後１２時３０分　予定　（昼間）

場所：新宿区戸塚特別出張所　地下１階集会室

第１４回

日時：平成１８年１月１０日（火）
　　午前１０時３０分から午後１２時３０分　予定　（昼間）
場所：未定
第１５回
日時：平成１８年１月２６日（木）
　　午後６時３０分から午後８時３０分　予定　（夜間）
場所：未定
第１６回
日時：平成１８年２月９日（木）
　　午後６時３０分から午後８時３０分　予定　（夜間）
場所：未定
第１７回
日時：平成１８年２月１６日（木）
　　午後６時３０分から午後８時３０分　予定　（夜間）
場所：未定

また、次回は発表や討議の際にひとりの委員の発言時間を区切るという提案がありましたが、そのことについては、リーダーの高山委員を中心に決めてください。

○：（菊地）

12 月 8 日（木）「新宿まちづくり学」講座の件ですが、ぜひ、みなさんでお越しください。

●：（司会　高山）

今日はありがとうございました。